

第3部

刺激間隔を変化させた連続遂行課題における
行動抑制の生理心理学的検討

第1章 はじめに

第3部においては、第2部においてCPT-AXを行動抑制の評価課題として用いることの妥当性が一定程度見いだされたこと、さらにCPT-AXにおける課題変数の考慮の必要性が指摘できたことをふまえ、警告刺激と直後の刺激とのISIをランダムに変化させたCPT-AXを用いた検討を行う。このようなISIを変化させたCPT-AXの遂行成績と遂行時のERPに行動抑制の様相、そしてADHD児における行動抑制の困難さがどのように反映されるか、発達にともなう変化が認められるか、薬物療法の効果が認められるかを検討することを目的とする。

第2章では、健常児・健常成人を対象にISIを変化させたCPT-AXを実施し、ISIの影響が行動抑制に問題がない健常対象者において認められるか、発達にともなう遂行成績の変化が認められるかを検討するとともに、遂行時のERP記録を行い、ERP成分にISI変化の影響、発達的な変化が認められるかを検討する。これにより、ADHD児に本課題を適用するために基礎となる知見を得るとともに、健常対象者における行動抑制、実行機能といった自己制御がCPTの遂行成績、遂行時のERPにどのように反映されるかを明らかにする。

続く3章、4章においては、すでにADHD混合型と診断されたADHD児を対象に同様の検討を行い、ADHD児における行動抑制や実行機能の問題がどのように反映されるかを検討する。さらにADHD児の行動上の問題を改善するとされるメチルフェニデートによる薬物療法がこれらの指標にどのように関連するかを検討する。結果の考察にあたっては、第1部で概観したBarkley (1997c)によるADHDにおける行動抑制困難のモデル、運動反応の実行と抑制に関するMesulam (1981, 1990)のモデルをもとに、ISIを変化させたCPT-AX課題事態においてどのような刺激処理が行われ、ADHD児においてどのように問題が生じているのかを推察したい。

このような目的から、対象児は健常児、ならびにDSM-IVの診断基準におけるADHD混合型の診断を受けていることとともに、すでに薬物療法の効果が行動観察上認められているADHD児とする。薬物を扱う検討を行うにあたり、第2部と同様に保護者の承諾を得られたのち小児科医の管理のもとで実験を実施するが、日常への影響を最小限にするために多くの子どもが休薬日としている夏季休暇期間中に実施するとともに、より日常に近い状態を再現するため服薬量の統制は行わず、日常の服薬量を用いた検討とする。